ダニー・ボーイはロンドン/デリー出身？
「ダニー・ボーイ」の歌をめぐる一考察

小村　志保

Oh Danny Boy, the pipes, the pipes are callingの歌詞で始まる「ダニー・ボーイ」の歌はアイルランド民謡を代表する曲として世界中で親しまれている。第二のアイルランド国歌とさえ表されるこの曲だが、アイルランドに興味のある者にとっては厄介な曲でもある。それはこの曲が「ロンドンデリーの歌」「ロンドンデリーの曲」などの別名を持つためである。アイルランドを象徴するようなこの曲になぜロンドン/デリーという、イギリスによる植民地支配を最も強く思い起こさせる地名が付いているのだろうか。この疑問について検証してみた。なおアイルランドには北部アルスター（Ulster)、首都ダブリンを中心とした東部レンスター（Leinster)、西部コナハト（Connacht)、南部マンスター（Munster）の4つの地域があるが、本稿で扱う地名の多くは北部アルスター地方にある。1922年にアイルランドは南部26州がイギリスから独立して共和国となったが、アルスター地方9州のうち6州はイギリス領にとどまり現在の北アイルランドを形成している。また「ロンドンデリー」という言葉について曲名には「ロンドンデリー」、地名には引用部を除き「ロンドン/デリー」を使用する。

「ダニー・ボーイ」の歌は、法律家で作詞家でもあったイングランド人のフレデリック・エドワード・ウェザリー（Frederic Edward Weatherley, 1848-1929）によって、1913年に発表された。ウェザリーは生涯に約1500の歌詞を残しているが、この「ダニー・ボーイ」が最も成功した作品となった。ウェザリーの兄弟のうち医師であったエドワードがアメリカに移住していたが、その妻マーガレットがコロラド州で探鉱者たちから聞いた旋律をイギリスにいるウェザリーに伝え、それに歌詞を付けて完成させたものである[1)]。ウェザリーはこの数年前に「ダニー・ボーイ」の歌詞を他の旋律に付して既に発表していたのだが成功しなかった。そこでこの義理の妹から伝え聞いた旋律に改めて「ダニー・ボーイ」の歌詞を付けて楽譜出版社のブージー社（Boosey）から出版したところ、すぐに世界的な人気作品となった。楽譜の販売が一般化していたことや、オペラ歌手による録音がアメリカやヨーロッパで発売されたことも世界的に広まった理由とされている[2)]。当時のイギリスでは旺盛な消費文化を背景に楽譜の売れ行きが好調で多くの作詞作曲家や演奏家が存在し、またホテルなどではコンサート付きのパーティーが盛んに開かれ、その中には自前の楽団を持つ所もあった[3)]。このようなパーティーにおいて演奏された

のが民族音楽や伝統音楽で、スコットランドやアイルランドの曲に人気があったという。なかでも「ダニー・ボーイ」はアイルランドの伝統曲の中で今日に至るまで最も有名な曲となった[4)]。

ウェザリーが義理の妹から聞いたというこの曲は何だったのか。ブージー社から出された「ダニー・ボーイ」の楽譜を見ると「ウェザリー作詞」「古いアイルランドの旋律を改案」または「古いアイルランドの旋律」とあって、作曲者は明示されていない[5)]。だがこの旋律はウェザリーの曲が発売される60年近く前の1855年、アイルランドのダブリン生まれで画家のジョージ・ペトリー（George Petrie, 1789-1866）が出版したアイルランドの伝統音楽集に掲載されていた旋律と同じものである。アイルランドの古い建築物に精通し古物研究家でもあったペトリーは1851年、アイルランドの伝統音楽の保存と出版を目的とした協会をダブリンで設立している（the Society for the Preservation and Publication of the Melodies of Ireland in Dublin）。この協会はアイルランド国民に、知っている伝統音楽を教えてほしいと呼びかけている。16世紀からのイギリスによる入植政策によってアイルランド社会の支配層がイングランドやスコットランド出身のプロテスタント教徒に占められていることや、1840年代半ばの大飢饉によってゲール語とそれに伴う文化の担い手だったカトリック教徒のアイルランド人が多数死亡または移民したために、「年老いたケルト人の生存者たちから必死の努力で聞き取らなければ、間もなく数多くの曲が永久に失われてしまう」とペトリーは危惧していた。さらに「彼らの旧来の言語が死に絶える時には、それに伴ってこれまでに保存されてこなかったすべての伝統曲が確実に失われるだろう」から、これらの曲を収集することこそがペトリーにとって「自分の国に奉仕する最上の方法」だと述べている[6)]。

この問題の曲はペトリーの作品集に「作者不明の旋律」のひとつとして掲載されている。収集者は「ロンドンデリー州リマヴァディ（Limavady）に住むミス・J・ロス」で、「残念ながら曲の名前はミス・ロスから伝えられていないが、とても古い曲だと知らせてきた」とペトリーは記し「自分もその見解に同意する」としている。またロスは「その州の民衆の曲のうちまだ出版されていないものを数多く集めて私に送ってくれた」が、「2世紀以上にわたってイングランドやスコットランドから入植者たちが入ってきたにもかかわらず、農民にはアイルランド人がかなり多く」「これほど古い曲が残されている州は他にほとんどない」ともしている[7)]。この収集者の女性はジェーン・ロス（Jane Ross, 1810-1879）である。生涯にわたって伝統曲を収集したロスだが、彼女自身の手による史料が残されていないため、いつどこで誰からこの曲を採譜したのかは正確にはわからない。しかし同じく収集家であった彼女の兄ウィリアムと姉妹ののうちのひとりセオドシアによれば、この曲を採譜したのはジェーンで1851年のことだったという。セオドシアの残した筆記にはこの曲の楽譜が残っており、これを採譜したのはジェーンだったとのことである[8)]。

ウェザリーは自身の作品「ダニー・ボーイ」に使用した旋律について、その曲名も作者も記していない。しかし実は「ダニー・ボーイ」発表以前に既にこの旋律には「ロンドンデリーの調べ（Londonderry Air）」という名前が付けられていた。初めてこの名前を使用したと考えられているのは1894年出版の*The Irish Song Book*である。この本を編集したのはダブリン生まれでアイルランドの文芸復興運動などでも活躍したアルフレッド・パーシバル・グレイブス（Alfred Percival Graves, 1846-1931）で、アイルランドの伝統音楽に英語の歌詞を付けた作品を119掲載し、そのうちのひとつの作品で「ロンドンデリーの調べ」という表現を使用している[9)]。なぜグレイブスがこの表現を用いたのかは定かでないが、この本の中で彼はペトリーの作品集に言及しており、「ロンドンデリー州で収集された」曲との記述からこの表現になったのかもしれない。

ウェザリーの「ダニー・ボーイ」の人気とあいまって「ロンドンデリーの調べ」という名称が普及していくのだが、この名前にはいくつか問題がある。まずこの旋律がロンドン/デリー州にだけ特有のものではないということである。「ダニー・ボーイ」発表から5年後の1918年には既に、自身も伝統音楽の収集家でロンドン/デリー州で子供時代を過ごしたホノリア・ゴールウェイ（Honoria Galway, 1830-1924）は、この旋律が隣接するドニゴール（Donegal）州でも広く知られていることを証言しており、またアルスター地方アーマー（Armagh）州出身で自身も音楽家だったアニー・パターソン（Annie Patterson, 1868-1934）もこの旋律を子供の頃から覚えており、アイルランド北西部全域で一般的に知られていると話している[10)]。そうだとすればロンドン/デリー州に限定した曲名は正確ではないと言えるだろう。さらに「ロンドンデリーの調べ」とほぼ同じ旋律が実はもっと古い作品集に掲載されていたことがわかった[11)]。これはパターソンと同じくアーマー州出身のオルガン奏者エドワード・バンティング（Edward Bunting, 1773-1843）が自身で収集したアイルランドの伝統音楽をまとめて1796年に出版したもので、Aislean an Oigfear（若者の夢、The Young Man's Dream）という曲名が付けられている[12)]。この作品は「ロンドンデリーの調べ」とほぼ同じ旋律と判断されており、また明らかにロスより早い時期のものであるから、曲名を「若者の夢」と改めることも可能だろう。

バンティングが「若者の夢」と出会う過程には、当時のアイルランド情勢が様々に反映されており興味深い。バンティングが音楽収集を始めるきっかけとなったのは、1792年に開催されたベルファスト・ハープ・フェスティバル（Belfast Harp Festival）である。この大会を開催するために尽力したのはアルスター地方アントリム（Antrim）州生まれのジェイムズ・マクドネル（James MacDonnell, 1763-1845）である。医師でゲール語の話者でもあったマクドネルはベルファストで貧者のための病院設立にかかわるなどしたほか文化活動にも熱心で、ゲール語やゲール語文学、さらに伝統音楽、特にハープに強い関心を持っていた。マクドネルの幼少期、自宅には同じくアルスター地方タイロー

ン（Tyrone）州出身のハープ奏者アート・オニール（Art O'Neill, c.1734-1815）が同居しており、このオニールを通じて音楽の素養を身につけていた[13]。1791年12月、マクドネルは回覧文で「古くからのアイルランド音楽と詩を復興し保存していくために」「今ではアイルランドの詩歌や口述文化のほぼ唯一の担い手となり、古来の吟遊詩人の末裔とも言うべき存在のハープ奏者たちを一堂に集めるべき」だとしてハープ・フェスティバル開催のための寄付金を募っている。さらに「民族の精神や性質は、その国の詩や音楽に深く関係しているので、アイルランドの愛国者や政治家は、ハープ奏者の大会を援助して擁護することを価値のないものとは考えないはずだ」とも呼びかけている[14]。

この回覧文でマクドネルが「愛国者」（Patriot）という言葉を使っていることは注目に値する。アイルランドの歴史において「愛国者」という言葉は時代や立場によって大きく異なる概念であって、慎重に扱わなければならない。18世紀のアイルランドにおける「愛国者」は、やや奇妙な印象を与えるかもしれないが、主にイングランド系またはスコットランド系のプロテスタント教徒たちであった。イギリス本島からアイルランドへの入植は、12世紀のノルマン人の流入に始まり、宗教改革を経た17世紀初頭以降はプロテスタント教徒の入植によって本格化した。この間イギリスからの入植者たちやその子孫は常に、アイルランドの文化や習慣を野蛮で劣ったものだと捉え、特にゲール語とそれに伴う様々な風習を抹殺すべきだと考えていた。ノルマン人入植者たちはしかし、次第に「アイルランド人よりもアイルランド人」になって同化する場合が多かったため、これを防ごうと1366年にはキルケニー法（the Statute of Kilkenny）が施行されている。この法律はイギリス本島出身者の居住地域では英語を話して英語名を名乗り、英国式の生活をするように定めており、またアイルランド人との結婚を禁じていた。しかし実行性に乏しく効果が上がらなかったため15世紀中に何度も発令し直された後、1610年代になって廃止されている。他方17世紀以降アイルランドに入ってきたプロテスタント教徒の入植者たちには、言語や文化の違いに宗教の違いが加わり、カトリック教徒のアイルランド人と同化する余地はなかった。プロテスタント教徒である彼らの使命は、カトリック教徒をプロテスタントに改宗させ、ゲール語に代えて英語を教えて話させることによって、アイルランド人を「文明化」することであった。

したがって18世紀にプロテスタント教徒がアイルランドの「愛国者」を名乗るのは矛盾しているように見えるが、彼らには彼らに特有の「愛国心」があった。彼らはアイルランドに住むイギリス人として、アイルランド議会がイギリス議会に従属していることやイギリスとの貿易において不利益を被っていることなどを是正したいと考えていた。アイルランドはイギリスの植民地ではなく、等しく英王室を頂く別の「王国」なのだから、それにふさわしい立場が認められるべきだと主張していたのだ。しかし彼らの「愛国心」とはあくまでもアイルランドに住むイギリス人としての立場によるもので、人口の大多数を占めるカトリック教徒のアイルランド人はほとんど考慮に入れられていな

い。ところが18世紀も後半になると政治や経済の面だけでなく、文化の面でもアイルランドは別の「王国」であることを強調する考え方が現れ、プロテスタント教徒の間でゲール語やゲール文化への関心が強くなった。大規模な都市になりつつあったベルファストでは特に、アメリカの独立やフランス革命の影響を受けた急進的な政治思想と文化的復古主義が広がり、彼らの中にはユナイテッド・アイリッシュメン（the Society of United Irishmen, 1791 ～）という結社に参加する者も多くいた。ユナイテッド・アイリッシュメンは1798年になってイギリスに対して大規模な反乱を起こすのだが、カトリック教徒の父とプロテスタント教徒の母を持つマクドネルがハープ・フェスティバルを開いたのは、このような時代のベルファストだった[15)]。これまでに述べたペトリーやロス、バンティングなどはプロテスタントの家庭に育ち、「独立した国としての意義を探すアイルランドの知識層」の代表的な存在だったといえよう[16)]。ただし彼らの興味はあくまでも遺物としてのゲール語や伝統音楽であって、大飢饉の後急速に衰退したゲール語を日常生活の言語として取り戻すことを目指したゲーリック・リーグ（the Gaelic League, 1893 ～）に代表される19世紀末頃から盛んになったゲール復興運動（the Gaelic Revival）とは一線を画す。

バンティングが音楽収集に従事するようになったのは、ベルファスト・ハープ・フェスティバルで演奏曲を採譜するよう依頼されたためだった。8歳の時に孤児となり11歳でベルファストにある教会のオルガン奏者となったバンティングは、紡績業で財を成したマクラッケン家と共に生活していた。これは後に1798年の反乱の首謀者として逮捕され処刑されたヘンリー・ジョイ・マクラッケン（Henry Joy McCracken, 1767-1798）の家族で、ヘンリーとは兄弟のように育ち、ヘンリーのおじはハープ・フェスティバルの主催者のひとりでもあった。また先述のもうひとりの主催者マクドネルは10代の頃、ヘンリーの妹メアリー・アンや他の兄弟たちと同じ学校に通った旧知の仲だった。こうしたことからバンティングはマクラッケン家やマクドネル、さらにはユナイテッド・アイリッシュメン結成の中心人物セオボルド・ウルフ・トーン（Theobald Wolfe Tone, 1763-98）やトマス・ラッセル（Thomas Russell, 1767-1803）とも親しくなっていた。このような経緯から音楽の才能のあった19歳のバンティングが採譜を担当することになった[17)]。

ベルファスト・ハープ・フェスティバルは1792年7月11日から4日間開かれた。「アイリッシュ・ハープの旅回りの演奏者の数が急激に減り、それに伴ってこの優しく感情豊かな楽器自体の数も減っている」のを懸念して「国内の各地域に散らばっているハープ奏者たちを集めること」を目的としていた。バンティングはこの時「何世代にもわたって継承されてきた」古い旋律に「ひとつの音符も付け加えないようにと特に注意されていた」[18)]。1780年代に他の地域で小規模な大会が開かれてはいたものの、伝統音楽を主題にした本格的な大会はベルファストでのこの催しが最初となった。会場となった集会場

に現れたハープ奏者は15歳から97歳の10人だったがほとんどがアルスター地方の出身者で、原則として各奏者は3曲ずつ演奏した。観客席にはトーンやマクラッケンの姿もあったが、マクラッケンはこの6年後反乱の首謀者として逮捕され、その時には裁判所として使用されていたこの同じ集会場で絞首刑を言い渡されることになる。トーンはこの大会について「新鮮味がなかった」とあまりいい印象を持たなかったらしいが、「優れたアイルランド音楽はもう既に書かれてしまっているようだ」[19] との彼の感想は正しかったかもしれない。バンティングはこれらの「もう既に書かれた」音楽に興味を持ち、この大会の後すぐに音楽の採集旅行に出かけている。音楽収集は生涯続き、結局1796年、1809年、1840年と3度音楽集を出版することになった。採集旅行や出版を資金的に援助したのはマクラッケン家で、ゲール語の知識が十分でなかったバンティングを助けるために、ゲール語教師だったパトリック・リンチ（Patrick Lynch/ Pádraig Ó Loingsigh, c.1756–1838）が同行することもあった。リンチは1795年に初のゲール語による雑誌を出版した人物である[20]。

大会に出場した10人の参加者のほとんどは、「ほぼ絶滅しかけていた古いタイプのハープ奏者」だったが、このうちバンティングに最も強い印象を残したのは最高齢の97歳で盲目のハープ奏者、デニス・ヘンプソン（Denis Hempson/ O'Hampsey/ Dempsey, c.1695-1807）だった。ヘンプソンだけが「長く曲がった爪で演奏し」「とても古い、アイルランドに土着的な音楽を洗練された優雅さで演奏できた」のだった[21]。バンティングは大会の直後からヘンプソンの家に通ってはその演奏を楽譜に書き起こしていたという[22]。1796年版に掲載した「若者の夢」はこのヘンプソンがバンティングに聞かせたものだった。バンティングが残した手書きの記録によれば1795年から翌年にかけてヘンプソンから「若者の夢」を聞き取っている[23]。この機会がなければ永久に失われていたかもしれない「若者の夢」やその他の曲がバンティングの手を借りて、この大会をきっかけに後世に残ることになったという点で、ベルファスト・ハープ・フェスティバルはアイルランド伝統音楽にとって極めて重要な出来事であった。バンティングはヘンプソンが100歳を超えてからも彼の家へ足繁く通い、「無数の非常に古い曲」や「古くからのハープ奏者が使っていた数多くの音楽用語」を教わっている[24]。彼の演奏する曲には「今日的な修飾」がなく、むしろそれを「懸命に避けようとしていた」。ハープ・フェスティバルで「他の奏者は指の腹だけを使って演奏」していたのに、「長く曲がった爪」で「爪と指の肉との間で弦をはじいていた」のはヘンプソンだけで、この時代には既に珍しいものだったという。なぜそのような奏法なのかと尋ねると、答えは決まって「このように教わったからだ」か「この方法でしか演奏ができない」だった[25]。ゲール社会の族長やノルマン貴族たちのいわばお抱えの存在だった楽器奏者や吟遊詩人たちが存在できる社会は、イギリスの植民事業が本格化して以降失われてしまったが、112歳という長寿だったヘンプソンは「もう長いこと時代錯誤になってしまっていた古い貴族文化の残像」[26]

だったと言うことができるかもしれない。

ところで「ロンドンデリーの調べ」について、1855年にペトリーの作品集に突如として現れ、それ以前にこの曲の異形が見当たらない、として「とても古い」旋律ではなく後の時代の創作ではないか、または採譜者のロスが手を加えたのではないか、あるいはもともとは他の国の曲だったのではないか、などの意見がある[27)]。しかし実際には1796年の「若者の夢」の先例があり、他にも多くの異形があることがわかっている。これらは曲名も様々で、歌詞のないもの、ゲール語か英語の歌詞があるもの、など多様である。伝統音楽の世界では「曲に人気があればあるほど異形が生まれる可能性が高く」、演奏者や歌い手によって韻律や音域は変わることがあり、口述あるいは楽譜で伝わる際にも変化する可能性があるので、一見すると同じ曲には見えない作品でも実は同じ旋律を基にしている場合がある[28)]。ペトリーがある曲を収集した際には「50もの異形」があり、「ある曲ともうひとつの曲との違いがとても大きいので、構造を注意深く分析することによってのみ」「根幹が同じ旋律だと判断できる」と記している[29)]。「若者の夢」には多くの異形があるが、その旋律が変化したものが「ハイド城（Castle Hyde）」という曲になったと考えられている。さらにこの「ハイド城」の旋律に別の歌詞を付けたものが「ブラーニーの森（The Groves of Blarney）」として知られるようになった。また「若者の夢」と「ハイド城」は「トゥルアの緑の森（The Green Woods of Truigha）」という共通の曲から派生した可能性が指摘されている。トゥルアはアルスター地方モナハン（Monaghan）州の地名である[30)]。この「トゥルア」の旋律には各地域で異なった曲名が付けられており、代表的なものだけでもアルスターでは「トゥルア」だがレンスターでは「丘の上のエドモンド（Edmund on the Hill/ Éamonn an Cnuic）」コナハトでは「オグラダ大佐（Colonel O'Grada）」マンスターでは「大か小か（More No Beg）」などと呼ばれており、このことからもこの旋律が広く浸透していたことがうかがえる[31)]。「トゥルア」より「丘の上のエドモンド」のほうが古いとする説もある。この曲は「16世紀末に作られ、1600年から1760年の間に様々な変化を経て、多くの異なる曲名が付けられた。たとえば若者の夢、トゥルアの緑の森、オグラダ大佐、ブラーニーの森、ハイド城、ジェフェリーズ夫人の喜び（Lady Jefferie's Delight）など」で「この曲ほど変遷を遂げた曲はない」という[32)]。これらの曲に関連性がある可能性を示すものとして、1840年から1850年にかけてマンスター地方で音楽を収集したウィリアム・フォード（William Forde, 1795-1850）とジョン・エドワード・ピゴット（John Edward Pigot, 1822-71）が残した手書き史料も参考になる。ピゴットは「オファレル（O'Farrell）氏から得た曲」について、曲名を初め「若者の夢」と書いたものの、これを線で消して「ハイド城」と書き直し、最終的には「ヨールの港（Youghal Harbour）」と記している[33)]。また別の研究者は「若者の夢」が「ブラーニーの森」の原形だと指摘している[34)]。このように「ロンドンデリーの調べ」つまり「若者の夢」はアイルランド各地に多くの異形を持つ旋律

で、最近の創作ではなく「アイルランドの伝統音楽に確固とした地位を持つ」作品と言える[35)]。

ところで「ブラーニーの森」という曲につて少し触れておきたい。そもそもこの曲は「ハイド城」の旋律にリチャード・アルフレッド・ミリキン（Richard Alfred Millikin, 1767-1815）が歌詞を付けた作品に限定して付けられた曲名だった。マンスター地方のコーク（Cork）州出身で詩人や作詞家などとして活動していたミリキンは、1798年か翌年にこの歌詞を作ったという。元々はある旅回りの詩人がハイド城をたたえる詩歌を作り、それを城へ持参した。これが「ハイド城」という曲なのだが、この詩人は門で追い返されたために腹を立て、今度は城の主を侮辱する歌詞を付け加えて所構わず歌っていたところ、庶民の間で人気になった。そのうち上流階級でも「ハイド城」が流行し始め、その旋律にミリキンが故郷コーク州にある地名ブラーニーを取り入れて新しく歌詞を付け、滑稽な歌に仕立てたものが「ブラーニーの森」だった。したがって「ブラーニーの森」とは「ハイド城の旋律、作詞ミリキン」とされるべき作品なのだが、これが「ハイド城」をしのぐ人気となったため、その旋律までもが「ブラーニーの森」として広まったものだった[36)]。そしてこの「ブラーニーの森」は日本でも親しまれている歌の旋律でもある。その歌とはダブリン生まれの詩人トマス・ムーア（Thomas Moore, 1779-1852）が「ブラーニーの森」の旋律に歌詞を付けた「夏の名残のバラ（Tis' The Lase Rose of Summer）」で、これを日本語に訳したものが「庭の千草」である。ムーアは1807年から1834年の間にアイルランドの伝統音楽に自作の英語詩を付けた作品集を10冊出版しており、多くの旋律をバンティングの作品集から引用している。「夏の名残のバラ」はムーアの作品集においては「ブラーニーの森の旋律、作詞ムーア」と表記される。ムーアは「若者の夢」「ブラーニーの森」「トゥルア」の旋律は別々のものと思っていたようで、それぞれに別の歌詞を乗せている[37)]。アイルランドの国民的詩人あるいは愛国詩人と呼ばれるムーアだが、一連の出版で多額の収入を得たにもかかわらず、著作権が確立していない時代だったためもあってバンティングには利益がなかったことや、伝統音楽にゲール語ではなく半ば強引に英語の歌詞を付けて原曲を軽視したことで批判もある[38)]。ペトリーはムーアが旋律の注意深い分析を「怠ったか、する能力がないために」「『若者の夢』の現代版である『ブラーニーの森』つまり『夏の名残のバラ』をそれぞれ違う曲として発表した」と批判している[39)]。ところで「アイルランドは『庭の千草』の国ですね」とある年齢以上の方々に聞かれることがあるのでこの歌について調べたところ、1884年に『小学校歌集第三編』（文部省音楽取調掛編）に収められ戦前まで小学校唱歌として歌われていたためだとわかった。文部省の音楽取調掛にいた里見義（1824-86）が日本人によりなじみやすいようにとバラを菊に代えて作詞したのだという[40)]。「トゥルア」や「丘の上のエドモンド」から「若者の夢」「ハイド城」を経て日本で「庭の千草」となったわけだが、これもアイルランド伝統音楽の奥深さの証明だろうか。本稿を執筆

するにあたって思いがけず判明したのは「ダニー・ボーイ」と「庭の千草」が根幹に同じ旋律を持つという事実だった。

最後にロンドン/デリーという地名について考えておきたい。17世紀初頭までのアルスター地方は国内で最もゲール文化が色濃く残る地域で、ここを広く支配していたのはオニール（O'Neill）一族とオドネル（O'Donnell）一族だった。それぞれの族長ヒュー・オニール（Hugh O'Neill, c.1550-1616）、ヒュー・オドネル（Hugh O'Donnell, 1572-1602）とイギリスとの間で起きた九年戦争（1594-1603）でアルスター側が敗北した後、1607年9月に両一族やその家臣などがヨーロッパ大陸へ逃亡する。英王室は両一族やその臣下が支配していた土地を没収、その地域をイングランド人とスコットランド人に入植させて「文明化」「プロテスタント化」し、さらなる反乱を抑え込もうとした。現在のロンドン/デリー州、アーマー州、タイローン州、ドニゴール州、ファーマナー（Fermanagh）州、キャヴァン（Cavan）州がこの地域にあたり、1608年から1610年にかけて具体的な入植計画が練られた。1610年から実際の入植が始まったが、この大規模な入植には多額の費用がかかるため、英王室はその一部をロンドン市に負担するよう促した。その結果1610年1月にロンドン市はデリー（Derry）、コルレイン（Coleraine）、ロッホインシュリン（Loughinsholin）と呼ばれていた地域での入植の費用を負担し事業を監督することで王室と合意した。1613年3月にはジェイムズ一世の勅許状により、この地域をまとめて新たな州とし、その名前を「ロンドンデリー州」とすることが宣言された。同時にロンドン会社（the London Company）が入植事業の遂行や監督を担当することになった[41)]。

イギリスによるアイルランド各地での植民計画は1515年に最初の提案がなされ、実際の入植が始まったのは1556年、最後になったのは1630年である。入植の規模や手法は様々で、政府や王室負担の事業の他に、個人による入植事業もあった。最も規模が大きかったのはアルスター地方とマンスター地方の植民事業だったが、これらには細かい規則があった。植民事業の中心的役割を担う「請負人（undertakers）」は1000から2000エーカーの土地を与えられ、1000エーカーごとに少なくとも10のイングランド人かスコットランド人の家族を住ませること、防護壁に囲まれた石の家を建てること、アイルランド人の借地人を受け入れないこと、などと定められていた。他に「従者（servitors）」と呼ばれた人々は九年戦争で功績のあった役人や兵士で、その対価として1000から2000エーカーの土地を与えられた。彼らはアイルランド人を借地人とすることも許されていたが、その場合本来より高い借地料を払わなければならなかった。また九年戦争でイギリス側に付いたアイルランド人は「それに値するアイルランド人（deserving Irish）」として土地を与えられ、アイルランド人の借地人を受け入れることもできたが、「請負人」や「従者」より借地料は高額だった[42)]。ただこれらの規則は非現実的で、計画通りに進んだものはほとんどなかった。次に大規模な反乱が起こる1641年までにアイルランド全土には

8万から12万人の入植者がいたと推定されているが、これは全人口の一割以下で入植事業を計画通りに進めるには不十分な数だった[43]。とはいえそれまで最も強くゲール文化の残っていたアルスター地方が最もプロテスタント教徒の多い地域に変貌したことは、これが今日の北アイルランド紛争の下地となったことを考えても非常に重要なできごとであった。

以上のようにロンドン/デリーという地名はイギリスによる植民事業によって生まれたものだったため、長らく論争の的となってきた。アイルランドの人々はこの地名をあまり使わず「デリー（Derry）」と呼ぶ場合が多い。「デリー」はゲール語のDoire「デーレ（柏の木のある場所）」を英語化した呼び方で、こちらを使うほうが自然なのだろう。アイルランドは独立後ゲール語と英語の両方を公用語としたので地名も両方併記となり、また植民地時代の地名も変更されたので[44]、そのことからも「デリー」を使うのが一般的で、新聞、テレビなどの報道機関も基本的にデリーを使用する。一方北アイルランドでは「ロンドンデリー」を使う場合と「デリー」を使う場合とが混在しているが、これはそれぞれの個人や団体、報道機関の立場を反映したものである。カトリック教徒やアイルランド共和国との統一を望む人、あるいはそれを支持する報道機関や団体は「デリー」を使用し、プロテスタント教徒やイギリス残留の継続を望む人、またそれを支持する立場は「ロンドンデリー」を使うことが多いのだが、紛争が激しくなった1960年代以降この傾向が顕著となった。しかし最近では、特に1998年に紛争の和平合意が成立して以降、双方の立場を尊重して、Derry-LondonderryやLondon/Derryなどの表記を使うことも多くなってきた。それでもなおこの地名をめぐっては論争が続いている。現在「ロンドンデリー州」「ロンドンデリー市」が正式名称だが、市議会の正式名称は「デリー市議会（Derry City Council）」である。これは1984年、南北統一派が多数を占めていた市議会が名称を変更したためである。その後2006年に市議会は、議会だけでなく市の名称も正式に「デリー」に変更するため北アイルランド最高裁に司法審査を要請した。2007年の裁定では市議会の名称変更が市の名称変更をも意味するものではないとして市の名称変更は許可されず、立法措置か国王大権によってのみ市の名称変更が可能だとしている[45]。

「ダニー・ボーイ」の成功後、「ロンドンデリーの調べ」を様々に編曲した作品や別の歌詞を乗せた歌が次々誕生し、5年後の1918年にはそれらが「コンサートの演目に載っていない週はない」ほどで、1923年までには既に80以上の歌詞が発表されていたという[46]。その結果ウェザリー以外の作詞者による歌も旋律だけのものも、「ダニー・ボーイ」「ロンドンデリーの歌」「ロンドンデリーの曲」などと呼ばれて混乱を招いている。些末なことかもしれないが、まずはウェザリーの作詞した作品以外を「ダニー・ボーイ」と呼ぶことはできないということを確認しておきたい。またウェザリーの作品を「ロンドンデリーの歌」と呼ぶことも正しくないので避けてほしい。「ロンドンデリーの」と言え

るのは旋律のほうだけで、「歌」つまり歌詞の付いたものには本来使えない。歌詞のない旋律だけを扱う場合には「ロンドンデリーの調べ」「ロンドンデリーの曲」となるのだろうが、できれば日本でももう少しアイルランドの文化を尊重して「デリー地方の調べ」「ロンドン/デリー地方の曲」などとしてほしいとも思う。ただ先述したようにこの旋律はロンドン/デリーに特有のものではないので、「アルスター地方の調べ」「アイルランド北部の曲」としてもよいのだろう。ウェザリーが「ダニー・ボーイ」を発表した翌年に第一次世界大戦が始まり、その後1918年から1921年にかけてはアイルランドの独立戦争が起き、さらには北アイルランド紛争の激化もあって、「ダニー・ボーイ」は戦争や戦場と結び付けて捉えられることが多いが、当然のことながらウェザリーがこのような事態を予見していたはずはなく、自身もこの歌に「反乱や殺戮の意図は込めていない」と語っている[47)]。歌をどのように解釈するかは聞き手の自由だが、「ダニー・ボーイ」を耳にされた際には、この短い曲ひとつにもアイルランドの歴史の断片が詰まっていることを思い出していただければと思う。

脚注

1) Frederic E. Weatherly, *Piano and Gown*, London, G. P. Putnam's Sons, (1926), pp. 277-9.
2) Brian Audley, 'The Provenance of *the Londonderry Air*' in *Journal of the Royal Musical Association*, Vol.125, No.2, pp.205-47 (2000), p.207.
3) Ronald Pearsall, *Edwardian Popular Music*, Vermont, David & Charles (1975), pp.12-3.
4) *Ibid.*, pp79-80.
5) http://www.boosey.com/shop/prod/Weatherly-Fred-Danny-Boy-Eb-Sgb-1005/645756 ; http://www.boosey.com/shop/prod/Weatherly-Fred-Danny-Boy-C-Sgb1003c/669837 .
6) George Petrie, *The Petrie Collection of the Ancient Music of Ireland, Vols. I & II*, Hampshire, Republished by Gregg Press (1967, first published in 1855), pp.xii-xiii.
7) *Ibid.*, p.57.
8) Audley, *op. cit.*, pp.210-2.ロスが曲を聞き取ったのはリマヴァディ付近出身の盲目のフィドル奏者ジミー・マッカリー（Jimmy McCurry, 1830-1910）だとの説が有力だが、確証はない。
9) Katherine Hinkson, 'Irish Love Song/Londonderry Air' in Alfred Perceval Graves, *The Irish Song Book with Original Irish Airs*, London, T. Fisher Unwin (12th ed., 1922, first published in 1894), p.141.
10) Henry Coleman, 'The "Londonderry Air"' in *Musical Times*, Vol.59. No.906, pp.349-50 (Aug. 1918), p.350.
11) Hugh Shields, 'New Dates for Old Songs, 1766-1803' in *Long Room*, Nos. 18-19, pp.34-41 (1979), p.38.
12) Edward Bunting, *General Collection of the Ancient Irish Music*, Dublin, W. Power (1796), p.9.
13) A. J. Hughes, 'Robert MacAdam and the nineteenth-century Irish language revival' in Fionntán de Brún (ed.), *Belfast and the Irish Language*, Dublin, Four Courts Press, pp.43-64 (2000), pp.46-7.
14) Circular letter by James MacDonnell, Dec. 1791, quoted in Charlotte Milligan Fox, *Annals of the Irish Harpers*, London, Smith, Elder & Co. (1911), pp.97-8.
15) Hughes, *op. cit.*, p.43.
16) Audley, *op. cit.*, p.208.
17) *Ibid.*, pp.47-8.

18）Bunting（1796），'Preface'.
19）Theobald Wolfe Tone, *Life of Theobald Wolfe Tone Vol.1*, Washington, Gales & Seaton（1826），pp.155-6.
20）Hughes, *op. cit.*, p.48.
21）Edward Bunting, *The Ancient Music of Ireland*, Dublin, Hodges and Smith（1840），p.3
22）Fox, *op. cit.*, p.109.
23）Bunting Collection MS29, Queen's University Library, Belfast, quoted in Audley, *op. cit.*, p213.
24）Bunting（1840），p.6.
25）*Ibid.*, p.73.
26）Shields, *op. cit.*, p.38.
27）*Ibid.*, p.38; Anne G. Gilchrist, 'A New Light upon the Londonderry Air' in *Journal of the English Folk Dance and Song Society*, Vol. 1. No. 3（Dec.1934），pp.115-21.
28）Audley, *op. cit.*, p.221.
29）Petrie, *op. cit.*, p.xv.
30）*Ibid.*, p.243-4; Bunting（1840），pp.16-7.
31）Bunting（1840），p.16.「丘の上のエドモンド」の初期の楽譜が以下に掲載されている。'Yemon O nock' in Burk Thumoth, *Twelve Scotch and Twelve Irish Airs*, London, J. Cox（c.1724），pp.28-9; 'Ye Trugh' in Unknown, *A Collection of the most Celebrated Irish Tunes*, Dublin, John and William Neal（1724），p.29.
32）William H. Grattan Flood, *A History of Irish Music*, Dublin, Brown and Nolan（1905），p.207.
33）Royal Irish Academy, Dublin, The Forde-Pigot manuscripts, MS24.0.22（7），tune 529, quoted in Audley, *op. cit.*, p.222.
34）Alfred Moffat, *The Minstrelsy of Ireland*, London, Augener（1897），p.5, p.285, p.342.
35）Audley, *op. cit.*, p.245.
36）Thomas Crofton Croker, *The Popular Songs of Ireland*, London, Henry Colburn（1832），pp.141-2; James Grove White, *Historical and Topographical Notes, Vol.3*, Cork, Guy and co.（1911），p.91.
37）'As a Beam O'er the Face of the Waters may Glow/ Air -The Young Man's Dream'; 'Tis' the Last Rose of Summer/ Air - Groves of Blarney' in Thomas Moore, *The Works of Thomas Moore*, Paris, A and W Galignani（1832），p.23, p.133; 'Silence is in Our Festal Halls/ Air –The Green Woods of Truigh' in Thomas Moore, *Moore's Irish Melodies*, London, Addison, Hollier and Lucas（1859），p.40.
38）Graves, *op. cit.*, pp.xi-xii.
39）Petrie, *op. cit.*, p.xv.
40）読売新聞文化部編『愛唱歌ものがたり』東京、岩波書店（2014）pp.366-9.
41）S. J. Connolly, *Contested Island: Ireland 1460-1630*, Oxford, Oxford University Press（2007），pp.291-3.
42）*Ibid.*, pp.291-2; John Andrews, 'Plantation Ireland: A review of settlement history' in Tom Barry（ed.），*A History of Settlement in Ireland*, London, Routledge（2000），p140.
43）Padraig Lenihan, *Consolidating Conquest: Ireland 1603-1727*, London, Longman（2008），p.54.
44）Queen's CountyがLais（リーシュ）County、KingstownがDún Laoghaire（ドゥンリアリー）など。
45）25 Jan. 2007, Application by Derry City Council for Judicial Review（2007 NIQB 5）.
46）Coleman, *op. cit.*, p.349; Audley, op. cit., p.208.
47）Weatherly, *op. cit.*, pp.277-9.

（本学非常勤講師）